

小説同人誌評 29

麦笛、高らかに

細見和之

今年はあるの東日本大震災から一〇年。世界中はまだ新型ウイルス禍のさなかにある。生活そのものが立ち行かないという苦境に陥っているひととどんどん増えているに違いはないが、ある意味文学にとっては恰好の状況かも知れない。家に閉じこもって来し方行く末を考えるのは、創作の原点だからだ。東日本大震災からの一〇年をあらためて振り返っているひとと多いはずで、いまは大切な時間を私たちが生きている…。そんな話があるリモーター講座でしていると、震災の現場ではまだまだ復興のさなか、というよりも、復興そのものができていない状況ですよ、と仙台のひとからたしなめられた。そうなんだ、ステイ・ホームで思いに耽るなんて状態ではまだどうていないんだと深く反省させられたのだった。そんなときに、まさしく仙台で発行されている同人誌『麦笛』第18号を読んだ。私ははじめて読む雑誌だが、作家の佐伯一麦を編集

人として、「麦の会」が発行している。「麦」という文字へのこだわりは、佐伯一麦の名前から来ているのだろうか。それにしても、よい作品が並んでいた。

同誌掲載の土合充夫「石臼挽きの男」は、仙台市の市民祭りで活躍していた野田という男の姿を描いて印象深い。野田は、大きな石臼で蕎麦の実を挽き、それをこねて見事な蕎麦を茹で上げていたのだ。高い声と低い声を同時に出すホーミーという歌い方ができたり、好きなことをなんでもこなす器用な男なのだが、どこか孤独な影がある。やがて野田は心筋梗塞で倒れ、その後離婚の噂が流れる…。

町の開発のなかで消えてゆく横丁の姿と、石臼を挽いていた野田の姿が哀切な形で重ねられている。

同誌掲載の竹野滴「と・う」は、今回読んだなかでいちばん密度の濃い作品だった。

主人公の「かれ」は社会福祉法人に勤務していて、訪問介護に携わっている。車椅子に乗って言葉を発することできない「匠さん」と「かれ」はアクリルの文字盤でコミュニケーションをしている。謎めいたタイトルの「と・う」は、その匠さんが示して「かれ」がどうしてもその意味を読み取れない文字である。そこには、健常者と障害者をめぐる言葉の問題だけでなく、関西出身の「かれ」と仙台の言葉の差異という問題もくわわって

る。しかも、仙台出身の「かれ」の妻がかつて関西で一緒に暮らしていたときに部屋に引きこもるようになった、ということがあった。くわえて、「かれ」の父は「かれ」が二十歳のとき自死していた…。

問題の「と・う」については春になって摘んでほしい庭の「ふきのとう」だったという解答が一応与えられているのだが、それも最終的には宙吊りにされる。この複雑な物語を綴る作者の筆致には、随所に優れたものが感じられる。これは作者にとってもとても大事な作品であると思える。だからこそ、もう少しゆつたりと、できるなら三倍、四倍にふくらませる形で是非とも書いてほしいと思う。

作者は大阪文学学校で私がチューターをしていたとき詩を書いていた。いまはこんな本格的な小説も佐伯一麦さんと向き合いながら書いているのだ。なんだか強く励まされた。

『メタセコイア』第17号掲載の、南田真「寡黙な拳」は、ボクシングの世界を描いた軽快なエンターテインメントに仕上がっている。

かつてスポーツ新聞の記者でいまはフリーのボクシングライターをしている小田川一馬は、ある日、ゴールデンジムの会長・大木から、高本俊一という新人ボクサーを紹介される。高本は仙台生まれで、震災孤児。中学三年のときに被災し、両親と祖母を亡くしている身だった。高本はデビューから三戦連続K

〇勝ちで、会長は「世界チャンピオンになる器」と考えているのだった。

早くも四戦目で、高本は世界フェザー級第五位の江崎丈太と闘うことになる。江崎の所属する東拳ジムはボクシング界のドンが会長を務める大手で、十五戦連勝中の江崎をこの試合で楽に勝たせて世界フェザー級挑戦者に仕立てようという思惑があるのだ。試合は十ラウンド制で、最終ラウンドまで闘われた。小田川の採点では圧倒的に高本の判定勝ちだが、ジャッジ三人のうち二人の外国人が江崎に軍配をあげたため、高本は敗れてしまう…。

ここから小田川もくわわっての江崎との再戦にむけた取り組みが展開してゆく。ボクシングの世界がよく描かれているうえ、会長の大本、その娘で女子プロレスラーの凜など、キャラクターもよく立っている。これだけで終えるのもつたいない。高本が実際に世界チャンピオンになるまでは描いてほしい。

ところで、「メタセコイア」関係者は、今回「別冊メタセコイア」として「コロナアンソロジー」も刊行している。いずれも今回のコロナウイルス禍をモチーフにした、多彩な作品が掲載されている。

中原なも「綾香の場合」では、スマホ上でのラインのやり取りを軸にして、コロナウイルス禍がもたらしている人間関係の微妙なズレが描かれていて、よしむら杏「鳥籠」では

七十五年後の未来小説の形で今回のパンデミックが振り返られている。人類はいったん三分の一にまで減少し、寿命は四十年と定められているという。しかも、視点人物として描かれている立花樹（いつき）がじつはAIロボットであったという仕掛けまでが組み込まれている。一方、多田正明「コロナ禍の日々」

は、地元の商店街の日常風景のなかでコロナ禍を捉えていて印象深い。また、南田真「コロナシミュレーション」は、今回の事態は本格的なパンデミックに備えて政府がシミュレーションによってデータ収集をしているという、いわば陰謀説的な捉え方を提示している。さらに櫻小路閑「スーちゃんとなーちゃんとの会話」にいたっては、人間の愚かさを批評する二つのウイルスの対話から成り立っている。この別冊は、今回のウイルス禍を逆手に取った輝かしい成果と呼ぶべきだろう。

「AMAZON」第504号掲載の、吉留敦子「帰宅」は、いま紹介した南田真「コロナシミュレーション」と同様のモチーフで書かれていて、印象深い。

「私」が海外旅行から帰ると、八十歳代の夫が死んでいる。救急車を呼ぼうとしても電話が繋がらない。それどころか、その町の一带からは悉くひとが消えているのだ。同じく海外から戻った男性と「私」はかろうじて出会う。その男の妻は、スマホに緊急避難の指

示があったため娘の家まで逃げていたのだと知らされる。「私」の夫はスマホを持っておらず、緊急避難の連絡が届かなかったようだ。しかし、夫の死因はなになのか。そもそも緊急避難の理由はなにだったのか。スマホに一元的に管理されているかの私たちの現状を、とびきり明晰な文体で描いた秀作。

「せる」第115号掲載の、谷山結子「ダイアリー」もコロナウイルス禍を背景に描いた作品。こちらは四百字詰め換算で百四十枚ぐらいで、今回読んだなかではいちばんの長篇。

主人公の川野由紀子は四十歳過ぎで、古いアパートでひとり暮らし。市役所の非常勤職員をしているが、思うに任せぬ日々を送っている。趣味はゲームセンターでUFOキャッチャーに耽るぐらい。誕生日に自分用に張り込んでケーキを買った帰り、自転車に張りついて原付バイクにぶつかられそうになって転倒したりと、不運が絶えない。しかし、その転倒の際に助けてくれた近所の居酒屋の店長「菊ちゃん」、そこに居合わせた同じアパートの住人・佐倉と出会うことで、川野は次第に心を開いてゆく。佐倉は川野の父親に等しい年齢で、佐倉には妻子（娘）と別れた過去があった。しかし、ある日、朝のゴミ出しから戻った際、あることが佐倉が勝手に自分の部屋に入っていたことを知り、川野は強い不信任感を募らせる…。

主人公の微細な心の動きとともに、佐倉、店長、アフロヘアの隣人の男など、主人公を取り巻く人物が鮮やかに描かれている。ただし、コロナウイルス禍はここではあくまで背景にとどまっている印象がある。

『西九州文学』第45号では、山本博幸「墓碑の庭」が長崎原爆の問題を長い時間の射程のなかで捉えた、四百字詰め換算で百枚を超える力作となっている。

冒頭の「私」の見る「里子さん」についての夢から、畑や果樹のある広い庭付きの「心平さん」の浦上の家に「私」が辿り着くあたりまで、少々分かりにくい場面が続く。「私」は小学校一年のときそのあたりに引越して来て、学校で解離性健忘症に陥り、その家をシエルトーのようにして過ごしていたのだ。

「私」は三年足らずでふたたび引越をしたが、十五年後のいま、新任教師としての仕事を始めた矢先、ふたたび解離性健忘症を起し、里子さんに関わる夢に促されて心平さんの家にまでやって来たのだ。「私」が小学生の時点では心平さんと里子さんは夫婦として暮らしていたが、里子さんは五年前に白血病で亡くなったのだ。

心平さんと里子さんが大切にしていた庭にはアゲハ蝶が不思議とたくさんやって来ていた。里子さんはそのアゲハ蝶は原爆で死んだ子どもたちの生まれ変わりじゃないかと思う

と「私」に語ったことがあった。そして、心平さんはあらためて大きくなった「私」に自分の被爆体験を語る…。

交尾のちに卵を産んで死んでゆくアゲハ蝶のイメージが繰り返し登場し、それは最終的に「私」が小学校のとき浦上で出会っていた啓介と再会し、結ばれ、啓介の子を宿するという結末に繋がってゆく。地道だが真摯な物語だ。

『八月の群れ』第71号掲載の、山咲真季「家族写真」は、父親違いの妹と思っていた相手がいづつは父親も同一の妹だったと判明するにいたる、よくまとまった短篇。

「私」の母は「私」が三歳のときに離婚して家を出て行った。以来、「私」は母とは会わずじまいだった。しかし、十三歳のときに思わぬことに母と「再会」する。中学入学と同時に引越しをした幼なじみの「早希(さきちゃん)」の新居を訪れたとき、隣家の母親が七五三のときの写真でずっと見ていた母親そっくりであるのに気づく。父はその写真を部屋に置き続けていたのだ。その「母」には自分より四歳年下の娘がいて、いかにも幸せそうだ。「私」はその父親違いの妹に激しい嫉妬を覚える。

早希が隣家の様子を伝えてくれて、「私」の推測はほぼ確信に変わるのだが、「母」と直接会わないまま、また父に打ち明けることもで

きないまま、「私」は高校、大学と進学し、就職する。さらには早希の後押しもあって、早希の兄と結婚し、娘を出産するにいたる。そんなときになって父がようやく母のことを語り始める。母には父と見合い結婚する前に付き合っていた相手がいって、離婚の際にも娘を手放すのを迷い、離婚後も半年間は娘の顔を見に来ていたが、最後に会ったとき、父は母に「すまないこと」をしてしまった…。

「私」が妹に嫉妬していたのと同様に妹もまた「私」に強い羨望を覚えていたという関係が説得力をもって描かれている。

『風の道』第14号では、吉田慈平「迷い道」が味わい深い掌篇となっている。

「私」は法務局へ出かける道すがら、缶ビールを飲みながら雀に砕いたビールナッツを巧みに与えている男を見かける。「私」はその姿に感心してコンビニで缶ビールを買ってきてその男に与える。すると、サングラスを掛けて杖をついた行きずりの男が野鳥に餌をやるなどすこむ。餌を与えていた男は隙を見てその相手の杖を取り上げる。一触即発のムードのなかで、餌やりの男が「おまえ、足はどうしたのだ」と問いかげ、膝が痛いという相手にじつは自分も膝が痛いという相手から一気に和やかな雰囲気と打ち明ける。そこから作者は「私」を舞台回しの位置において、見知らぬ男同士をみごとに出会わせている。

コロナ禍が登場する作品ではないが、コロナ禍のなかでの関係の強張り解きほぐしてくれるものでもある。

味わい深い掌篇ということ言えば、『中津川文芸』復刊第5号掲載の、鴨居諒「夢の岸」がまさしくそうだ。

それぞれ一行空きを施しながら、瀬尾という人物に関わる六つの連作が並べられている。描かれているのは、普段の散歩道で見かける湖の岸に半分引き上げられている舟の光景であったり、高校二年の娘が探している家にあるはずの人形の話であったり、暴風に揺れる竹藪の姿であったりする。

最後の連作で瀬尾が見る夢のなかで、瀬尾は湖でボートに乗っているの、そこには最初の湖の岸の舟の光景と繋がってはいるが、緩やかなものだ。ともあれ、散文詩と呼びたいほどの端正な文章で全体が綴られている。

『babel』第4号掲載の、井上豊明「小春日和」もよくできた連作。「ウサギと手袋」、「アイスモナカ」、「もみの木」の三篇からなるが、美術館付きのカフェで働く五十歳の誕生日を迎えた女性、再婚した母が間もなく下の子どもを産もうとしている小学校六年の男の子、彼女の勢いに押し切られるように結婚に向かいつつある男性と、視点人物が多様であり、文体もそれに応じていか様にも変化する。そして、全体にまさしく「小春日和」のような

温もりが感じられる。

一方、同誌掲載の、真銅孝「眠り」からは一種、寒々とした気配が感じられる。冒頭はいささか唐突にこう始まる。「転倒して頭を強く打する前、木嶋は駅前の古びた雑居ビルの一室で、居眠りをしていた」。そして、作品の大半は、この一文に折り畳まれていく含意を少しずつ開いてゆくようにして綴られてゆく。かつて小学校の講師をしていた木嶋は、いまは下町の商店街で小さな塾を経営している。四十代半ばの独身で、生徒がいてもうつつらうつら居眠りをしてしまうような状態。そんな塾の生徒のひとりに小学校四年の徹がいる。

両親が離婚していて、徹は焼き鳥屋シローを営んでいる祖父・俊雄との二人暮らし。その焼き鳥屋の二階が二人の住居になっている。木嶋はその焼き鳥屋シローにときどき顔を出す。倒れて頭を痛打したときも、そこで酒を飲んでいたので。

焼き鳥屋シローで客たちが交わす屈託のない会話が、木嶋、徹、俊雄の逃れがたい孤独を浮き彫りにしているようだ。

『鳥語』第81号掲載の、中尾哲也「故殺」は、癌で苦しむ妻の姿に耐えられず、モルヒネの投与を医師に願いつけた夫の姿が一種壮絶な形で描かれている。

良次の妻・朋子は三十三歳の若さで重い胃癌を患っている。時代は大阪万博の開催され

る一九七〇年。現在のように胃癌の生存率が高くない時期だ。朋子は一度手術を受けるが、その後も苦痛を訴え続ける。良次は主治医と副院長に「苦痛を取り除いてください。楽にしてください」と願いつける。副院長は「医者に殺人を強いるのかね」と取り合わない。とうとうモルヒネの注射がはじまったときに良次は「俺の意志で人の命をちぢめているのだ」と思わずにはいられない……。

ちょうど五十年前の出来事となるが、書いておかねばという熱意が伝わってくる作品だ。『別冊 關學文藝』第61号掲載の、浅田厚美「花火の鳥」は、十一歳年少の男性にどんどん引き寄せられてゆく四十七歳の女性の心理を描いている。

ある日「私」は職場の同僚の「土屋さん」から花火大会に誘われる。チケットが余っているからということだったが、その花火大会に出かけてから、「私」はどんどん土屋さんにはまってゆく。ラインを送り続けたり、職場でキーキの差し入れをしたり、駅で待ち伏せしたり。それこそストーカーのようになってしまふのだ。土屋さんはその後遠い職場に転出してゆく。どちらにも家族がある身で、読んでいてはらはさせられるのだが、女性にかぎらず恋愛心理の押しとどめようのない動きがよく描かれている。